

説苑

語部に關する研究

丸山 林 平

一 本研究の目的

私の専門的に研究してみようと思ふことは、わが國における物語文學 (Literature of Fiction) の起源及びその展開に關してである。而して、わが國に於ける物語文學の起源を尋ねようとする爲には、記紀または風土記等にあらはれてゐる所の所謂成文的物語だけに止まることは不可能であつて更にさかのほつて、記紀・風土記等の成文的物語となる前には、物語は果して如何なる性質のものであり、如何にして傳達されてゐたものであるかを考察する必要がある。しかるに、記紀・風土記等は何れも西紀の第八世紀^(一)に入つてからの編纂にかかり、わが國に漢字の傳來し従つて記載術が行はれたであらうと想像される應神天皇の御代^(三)からは、約四世紀半を経過してゐる。たとひ、この間にわが國の歴史の年代に疑問があるにしても、漢字の傳來が必ずしも應神天皇の十六年に始まつたわけではなく、

それより以前にすでに民間に傳はつてゐたものと考へ得られるのであるから、何れにせよ、記紀・風土記の編纂は、わが國に漢字の傳來してから四五百年後のことではなければならぬ。さうすると、その長い間において、史傳や物語が書物に記載されない道理はない。即ち、古事記の材料とされた帝紀または帝皇日繼・本辭・舊辭または先代舊辭の類や、または日本書記に引用せる一書の種類は、その長い間において記載せられまたは編纂された史傳であり物語であらねばならぬ。果して然らば、記紀・風土記の出現以前でも、或史的傳説や民間説話の如きは、すでに成文的物語となつてゐたと考へなくてはならない。而して、その内容や形式は、今日それらの文獻が無いのであるから明確に判斷は出来ないが、恐らく古事記の中に存する物語の如きは、その材料とされた帝記や舊辭と甚しく異なるものはなからう。何となれば、僅かに四ヶ月にして編纂された古事記が、その物語の内容を甚しく改作するといふやうなことは考へられないことだからである。たゞ、後にも言ふ如く、若し太安萬侶が苦心したとすれば、それは帝皇日繼と先代舊辭との結合の仕方にあつたであらう。さうして、それはまた天武天皇の勅語の主旨にも添へ奉るわけでもある。また、日本書記にしても、古事記その他の一書と稱する材料にもとづいて、編者の理想を中心として取捨されたものではあらうけれども、それとても物語の内容をひどく改作してゐると思はれない。たゞ、風土記だけは、民間に存する口碑説話を直ちに記載したものであらうことは、その成立の性質からさう判斷される。しかし、それとても、民間に記載的説話が全然存在しなかつたと斷定することも出来ない。何故なら、すでに漢字を使用し出してから、約四五百年を経過して居り、地方の學者でも風土記の如き文を成し得るまでに發達してゐたのであるから、その前に成文的説話が各地方に全然無かつたとは考へられない。

たゞ、記紀・風土記等の出現當時、若しくはそれより以前においては、文字を書きまたは読み得る人々の甚しく少なかつたことだけは想像される。従つて多くの人々は口から耳へ、また耳から口へと物語を傳へ、または傳へられてゐたことではあらう。

しかし、わが國における物語文學の起源を尋ねるためには、更にさかのぼつて、わが國に記載術の傳はらなかつた以前、即ち所謂神代または上代における物語の性質乃至傳達の方法について考察する必要がある。そのためには、「上古^(四)之世未^(五)有^(六)文字、貴賤老少口々相傳、前言往行、存而不忘、書契以來不^(七)好^(八)談^(九)古、浮華競興、還囁^(十)舊老^(十一)」といふだけのことは満足されない。何故なら、原始文學の性質は、成文的文學と若しくその性質を異にすると思はれるのであるが、古語拾遺の文では到底その性質を判斷することが不可能だからである。

こゝにおいてか、我等は語部なるものゝ存在に眼を向けなくてはならない。即ち、語部なるものは、いつ頃から存在し、いつ頃それは廢止せられたか。また、それは如何なる性質のものであつたか。また、それは物語の起源および展開に關して如何なる關係を有するか。およそ以上の如き問題について、この小論文をまとめてみたいと思ふのである。

二 語部研究史

語部についての研究は、餘り多くあらはれてゐない。重野安釋博士が

語部ノ事ヲ統輯セシ書、未ダ見當ラズ。

語部に關する研究（丸山林平）

といつてあられる如く、徳川時代の學者で語部そのもの、性質について組織的に研究した者は殆ど無いといつてよい。たゞ、語部が天嘗祭の卯月の儀式に奏したといふ古詞の性質について論じた斷片的の意見が二三存するに過ぎない。

一、平田 篤胤 古史傳（十の卷）

二、細井 貞雄 姓氏考

三、鈴木 重胤 中臣繹詞譜義（上卷）

凡そこの位のものであつて、和調葉や雅言集覽の如き辭書類にさへ「かたりべ」の語が載つてゐない程である。

しかるに、明治以後になつて、古代研究の熱が高まり、従つて古傳説の唯一の傳達者と目される語部についての組織的研究者が若干あらはれて來た。いま、その主なものだけについて概観を試みよう。

四、重野 安繹 國史綜覽稿 卷一 語部考 明治三十九年

この論文は、さすがに明治學界の權威者のそれだけあつて、博引旁證、加ふるに組織的科學的であつて、恐らく今日まであらはれてゐる語部の研究として白眉とさるべきものであらう。ことに、古事記の神語と天語歌と語部との關係に言及せられてゐるのは、必ずしも同博士の創見でもなく、またその論じ方にやゝ不満はあるけれども、とにかく博士の達識を示してゐる。また、語部の語言を大同本紀に求めて考證されてゐるのは、栗田寛博士の姓氏錄考證に據つたのではあるが、とにかく敬服に堪へない。たゞ私の賛し得られない點は、博士が古事記の材料となつたところの本辭舊辭が語部の語言であるとなせる點である。尤も、これは本居宣長の古事記傳にもとづいてさう考へら

れたものであらうが、私としては他に意見がある。しかし、それは何れ後に述べるであらう。

五、黒川 眞頼 日本書紀を讀む心得 總論 語部 明治四十三年

黒川眞頼全集第四卷に収められてゐる。博士の語部に關する研究は、研究といはんよりは寧ろ一寸した斷片的意見で日本書紀を讀む心得の中の一項として少しく言及されたものであるが、博士は語部を上古における教師であるとなし、口授學を家業とする部民であると論斷してゐられる。しかるに、文が極めて短いために、何卒首肯するに足る證據をも示さず、殆ど獨斷的に論斷してゐられるので、この論文に餘り多くを期待することは不可能である。

六、津田左右吉 古事記及日本書紀の新研究 大正八年

津田博士の説は、いはゞ一種の語部否定論である。即ち語部なる部民の存在は古事記にも日本書紀にも何等書かれてゐない。たゞその職掌が貞觀儀式や延喜式などに見えてゐるだけであるが、それは單に朝廷の儀式の際に古詞を奏するといふ一定の役目をなしてゐるに過ぎない。従つて、朝廷に古來から傳はつてゐる古詞があつて、語部といふものは、儀式の際にただそれを讀んだだけのものではなからうか。従つて語部は、上古から一般的に史傳や民間説話を物語るための部民ではなく、かの古野の國栖が古風を奏し、悠紀地方の歌人が國風を奏し、主基地方の民または華人等が風俗歌舞を奏するのと同様に、語部もまた天嘗會の前に當つて、臨時に、古來からのかりのある一定の諸國から人數を定めて召集されたもので、上古にさうした部民はなく、後世になつて制定せられた部民であらうと論ぜられてゐる。しかし、津田博士のこの説には多く議論の餘地が存する。それは何れ本論に入つて詳論したいと思ふ。

七、安藤 正次 古事記解題 第二章 語部考 大正十一年

安藤氏の論文は、加藤玄智博士編「古事記神代卷」の終に載つてゐる。而して、安藤氏の論據の材料としたものは、略々重野博士のそれと同様であり、少しく材料が不足してはゐるが、その大體の論調もまた重野博士に似てゐるやうである。たゞ、著しく異なる點は、安藤氏は語部の存在を極めて上古と考へ、それは寧ろ文字の使用以前に於て存在し、また存在の意義のあつたことで、文字の使用の廣まるにつれ、語部が部族的に衰滅したものと見るのである。而して、かの大嘗會の儀式に當つての語部の古詞を奏するが如きは、全く語部の餘風尊重のためであらうと見るのである。即ち、天武朝の如き、文化の進んだ時代において、しかも中央地方若しくは朝廷において、語部が古事を口誦するといふやうなことは、到底信じ得べからざることを論じてゐる。従つてまた、安藤氏の考へ方からすれば、古事記の材料とされたところの本辭舊辭が語部の語言であるといふ重野博士の説とは全く相容れないことになるのである。この點については、私は安藤氏の説に従はんとするものであるが、それらの詳細のことは後に述べるつもりである。

八、倉野 憲司 古事記の新研究 昭和二年

倉野氏は、重野博士の研究や黒川博士の所論は見えてゐないやうである。たゞ安藤氏の説を紹介して之に賛し、津田博士の説に首肯されないことだけを述べてゐられるが、倉野氏は更に諸外國の語部についての記事を諸書から引用してゐられるので、語部の比較研究の端緒ともいふべきものを示して呉れた點について感謝すべきであらう。

以上、語部の研究について、その主なるものだけをざつと見渡して來たのであるが、尙以上の他にも有益な研究

郡あらはれてゐるのかも知れないが、それらについては他日にゆづり、進んで語部の本質的考察に入ることにしよう。

三 語部の存在

語部なる部氏の存在は、古文獻に徴して明かなことであつて、毫も疑問の餘地が無いと思ふ。出雲風土記の意字、郡安來ノ郷の條に

語、臣猪麻呂、其子語、臣等云々。

とあり、更に同風土記によると、語臣猪麻呂の娘が和爾に捕られたので、猪麻呂が憤つて和爾を殺した記事が載つてゐて、その箇所の方註に

安來郷人語、臣等之父也、自爾時以來、至乎今日、經六十歲。

とあつて、語臣等が父のことを物語り、それを出雲風土記に載せたものと思はれる。即ち六十年前に父のなしたことを物語つたのである。恐らく多くの風土記の記事は、かうした語部の物語が記載されたものであらう。

次に日本書紀の天武天皇十二年九月丁未の條には

語造賜姓曰連。

と明記され、また、東大寺正倉院文書の天平十一年、出雲國大稅帳給歷名帳、出雲郡の條に

高年、波如里、戸主、語部、若璽、口、物部大女、年九十七、戸主、語部刀良、年七十、……戸主、語部小村、口、建

部臣御毛實、年七十、戸主、語部君環、口、語部酒津女、漆沼郷深江里、録、……戸主、出雲臣得麻呂、口、語部荒石、^{年六十}寡、……戸主、語部在井、口、物部伊毛女、^{年七十六}戸主、建部臣千足、同、口、語部奈久矢女、^{年六十}不能自存、戸主、……戸主、語部首手繼、口、語部首龍麻呂、^{年五十二}伊秩郷、寡、坂本里、戸主、語部牛麻呂、口、同部極實、^{年六十三}戸主、語部乃止志、口、同部創實、^{年六十一}戸主、語部麻呂、口、同部部犬良實、^{年五十七}戸主、語部刀良、口、同部送實、^{年四十七}同部、語部佐流實、^{年七十九}同、口、語部把實、^{年五十一}慥、坂奈里、戸主、語部井手、口、同部嶋守、^{年七}不能自存、坂本里、戸主、語部味乎、口、同部佐流、^{年五十二}戸主、語部井手、口、日置部夜惠實、^{年五十九}神戶、寡、戸主、神奴部馬身、口、同部伊佐實、^{年五十九}同、口、語部島實、^{年六十五}慥、小田里、戸主、語部立麻呂、口、刑部赤麻呂、^{年三十三}

とあり、語部の如何に多いかを知ることが出来る。次に、同書同年の備中國大槪負死亡人帳の條には勝部里、戸主、語直表。

の語が見え、同書天平十二年、遠江國濱名郡輪租帳には、新居郷、戸主、語部、首木戸、語部衣麻呂。

の語が見え、大寶二年十二月御野國味蜂間郡奈部里戸籍には語部善實。

の名が見えてゐる。更に、姓氏錄の右京神別上には

天語連、縣大養宿彌、同祖、神魂^{カミミコト}命^{ミコト}七世孫、天日鷲^{アマノハシラ}命之後也。

とあり、また、續日本紀の元正天皇養老三^三年十一月の條には

少初位上朝妻手人龍麻呂、賜^{アヲタケリ}海語^{ウミコト}連^{ムスリ}、除^{ノゾク}雜戶稅^{ミヤコノセ}とある。而して、この海語は天語と同義であること、すでに

先輩の研究で定説となつてゐる。重野安經博士は

海は天の同訓借字にて此時に始めて天語の姓を賜はりしにやあらん。

と述べてゐられる。尙、拾芥抄の姓戸録部にも「天語連」とあつて「天語」の方が通常の用例である。その他、天平十二年十二月、尾張國正稅帳にも

主張外少初位下勳十二等語部有島。

といふ者が署名してゐる。

かくの如く、語部なる部民は古文獻に散見してゐるが、それが何時代頃から存在してゐたものであるかを知るに足る文獻は殆ど見當らない。諸書に多く散見するのは、奈良時代であるが、しかし、語部の存在は、むしろ文字の使用前にこそ必要であるべきで、天武朝や天平時代の如き文化の發達してゐた時代において、たとひ語部なる部民が存在してゐたとしても、それはたゞ名のみのもので、實際に物語を專業としたのでは無からう。その點からいふと、寧ろ古語拾遺に

書契以來、不^レ好^レ談^レ古、浮華競興、嘖^レ還舊老。

とあるのが信じられる説である。黒川真頼博士は「日本書紀を讀む心得」において

語部 抑々此の口授學は、私が邦太古よりの學問にして、これを天語といひ、又事語言といひ其の言語を神言と

いふ。然して又此の學問を以て人の師となりて、一村或は數村の人民に教ふるものあり、これを目して亦天語といひ又語といひ又語部といふ。……此の天語は所謂教師なれば人民に尊敬せられたり。其の天語を以て家業とするもの甚だ多くなりしかば、朝廷より其の天語の人々を總監するものを命じてこれを總監せしむ。之を天語連といふ。

と述べてゐられるが、この天語連は前に引用せる姓氏錄の右京神別上と續日本紀の元正天皇養老三年十一月の條と拾芥抄姓戶錄部などに見えてゐるのであつて、それらの書によつてみても右の黒川博士の説の如く考へられないことも無からうが、とにかく右は一種の想像的臆斷である。

さて、語部の語言は如何なる性質のものであつたか。重野安繹博士は

(八)

語部の語言の今に傳はれると覺しきは、大同本紀と云ふ書に、天牟羅雲命が、天孫に供奉して天降せし時、天孫の命を承け、天上に歸り上りて水を取り來れる故事あり、是れ天語言ならむと云へり。

とあるが、天から水を取つて來たことゝ、天語言との關係は、これだけの文面では勿論判然しないが、重野博士は栗田寛博士の姓氏錄考證によつて此の言をなしたのである。栗田博士の姓氏錄考證の「右京神別上、天語連、縣大養宿禰、同祖神魂命七世孫、天日鷲命之後也」の考證の條に「七世の孫天日鷲命は高魂孫天日鷲刺矢命」とあつて、神代の天日鷲命ではなく、伊勢國造の祖なる天日別命にて、皇孫天降の處從たる天村雲命の孫であるから必ず當時の神語を傳へて、大嘗祭に其の故事を語つたのであらうと考へられ、その語言を大同本紀の左の語であらうと推測されてゐる。

皇太神宮皇孫之命天降坐時爾。天牟羅雲命御前立天。天降仕奉時爾。皇御孫命天牟羅雲命乎召詔久。食國乃水波未熟荒水爾。在介利。故御祖神御前參上此由申天來止詔。即天牟羅雲命參上天。御祖御前爾。皇御孫命乃申上給事乎細申上時。御祖尊詔久。雞爾奉率政波行奉下天在止母。水取政還天在介利。何神乎加奉。下率止思間爾。勇乎志天參上。來止詔天。天忍石乃長井乃水乎取八盛天。誨給支。此水持上天。皇太神乃御饌爾八盛。又皇御孫命乃御水仁八盛。賦天。還水波天忍永止天食國乃水於爾灌和天。獻初。又御孫爾天降奉仕神等。八十友乃諸人仁毛。斯水乎令飲詔天下率支。即受賜天持參上天。獻時仁。皇御孫命詔天。從何道會參上志止問給。申久。大橋波須賣太神。並皇御孫命乃天降坐乎恐天。從小橋參上止止申時。詔久。後仁毛恐仕奉事勇乎志止詔天。天牟羅雲命。天一上命。後小橋命止三名賜也。

この大同本紀の文は、群書類從、神祇部、卷第四、神宮雜例集卷第一（活字本百六十二頁）にも載つてゐる。栗田博士は、

これぞ天ノ語り事にて語り傳へたるべく、大嘗の時には、殊に大なる關係の事なれば、専ら之を語りたりけむ。と論じてゐられる。

さて、果して右の如くだとすると、たとひ天語連なるものが語部を總監するために、後世になつて、制定されたにしても、その頃は右の如き一定の古詞があつて、それを奏するだけのことゝなり、一般的に傳説を口授するといふやうなことは恐らく奈良朝時代には衰滅したのではなからうか。それが證據としては、天平十一年、出雲國大稅

脈給歴名帳に載つてゐる多くの語部は、録又は寡であり、さうでなくても多くは「不能自存」であつて、如何に語部なる部民の生活が衰退してゐたかどうかはされる。それは出雲以外の語部においても同様である。若し黒川眞頼博士の「此の天語は所謂教師なれば、人民に尊敬せられたり」といふことが、奈良時代の語部を指すとすれば、それは多くの反證によつて、くつがへされるであらう。たゞ、それが、上古において、文字の使用の無かつた頃の語部のこととするなら、それは首肯されていふ。

津田左右吉博士は、語部のこと古事記にも日本書紀にも書かれてゐないといふことから、それは上古に存在してゐたものではなからうと論じてゐられるのであるが、日本書紀には前述の如く語部の記事があり、尙又黒川眞頼博士のいはれる如く

神武天皇に、太古の事を語り聞かせし鹽土翁を事勝國勝といふ、事語勝語の義にて古事を善く知りて語るよりいふなり。

とすれば、書紀に語部の記事が無いとは決して言へず、また古事記の神語と天語類とは語部の在つたことを考へなければ全くわけの分らない言葉である。更に、大同本紀の天、村雲命の故事が古來の語言であつたとすれば、語部は神代から存在してゐたことは疑ふべからざることである。

而して、語部が貞觀年間や延喜年間において、大嘗祭の卯の日の儀式に古詞を奏してゐることは、貞觀儀式や延喜式に載つてをり、更にこの風習は北山抄や江家次第の記事によつて、平安朝時代を経て鎌倉時代に至るまで續いてゐることが分る。さうすると、語部は可なり後世まで續いてゐたのであるが、しかし、それは前にも述べた如く

語部の名と一定の職掌のみの存在であつたことは勿論である。而して、すでに足利時代に入つては、皇室の式微と、語部の衰滅との二つの理由で、語部の古詞を奏することの風習は止んでしまつたのである。すでにその頃は語部の奏する古詞が明かでなくなつてゐた。厚ち後花園天皇の永享二年に行はれた大嘗祭には、語部は古詞を奏してゐない。中原康富の康富記によると、

永享二年十一月十八日、乙卯時、是日大嘗祭也……次宮内官人率國栖、悠紀國司率歌人、伴佐伯率語部、各着座事無之、永徳亦如之。次國栖奏、歌女國風、語部古語等一向無之。

とあつて、「澁季之至、尤歎存」と歎いてゐる。これによると、すでに後小松院の永徳三年十一月十六日の大嘗祭の時から語部の古詞を奏することが廢せられてゐたのである。足利時代、若しくはそれ以前に於て、語部と名乗る部民は全く絶えてゐたのであらう。而して、それは當然のことである。文字の普及につれて語部の存在は無意義となり、單に儀式の時に奏する古詞すら、すでに不明になつたのも思ひ半ばに過ぎるであらう。

で、結局、語部は、神代から上代にかけて、文字の傳來及びその普通の初めまでは存在し又活躍したものであらうが、奈良時代には、すでに名だけ残つて實際的活動は止まり（極く片岡舎には多少その活動はあつたであらうが）、單に大嘗祭の儀式の時だけ一定の古詞を奏して來たのであるが、それも、足利時代に入つては、そのことすら止んでしまつたと見るのが正しいのではなからうか。

四 語部の性質

語部は文字の無い時代（Unlettered age）には、無くてはならない部民での職業である。それは、世界の何れの古代においても存在し、且つ、現代の未開民族の間に存在してゐるのである。

(12) W. Macniffe Dixon 氏の “English Epic and Heroic poetry” には古代の語部（bard）について言及してゐる箇所がある。

(13) In the heroic age, the age of epic beginnings, is not primitive, it is really an advanced epoch in the history of civilisation, whose art, like its constitution, is already mature and distinguished. When an audience capable of appreciating his skill is present, the gifted artist puts forth all his powers, since he knows it willing and able to reward him. And with the ruling class, where he is occupied with issues beyond the ken of the countryside, with tribal or nation I rather than village or domestic, more personal concerns, he is to be found. The affairs of leading men, the doings of princes and chiefs, the heroic episodes, the splendid achievements claim him and give scope to his talents. Thus in an unlettered age he becomes the official repository of the traditions, the heroic lore of his tribe, he becomes the chronicler of its great and memorable things. In the memory of the bard, the only library of the age, are stored the fact and fable which make the history and religion of his people.

即ち、この bard が語部であつて、文字の無い時代においては、bard の記憶が唯一の圖書館であり、bard の語る事實や物語が即ちその社會の歴史であり家教であるわけである。現在でも文字の無い未開民族の間には語部が存在してゐる。松岡靜雄の著「太平洋民族誌」によれば、ポリネシア人の間には口傳傳説が忠實に保存せられ、氏族の系譜なども數十代の長い間に亘るも記憶され語られてゐるさうである。また、アフリカの土人の間には、彼等が祖先から口々相傳へられた叙事詩（epic）があるが、その言葉が餘りに古いので、今では土人には意味の分らぬ古典

となつてゐるといふ話である。また、伊波普猷氏の著「琉球古今記」によれば、琉球には根取と稱する一種の職業的歌謡者があつて、よく歌謡を記憶し、依頼に応じて音頭を取つてゐるといふことである。伊波氏の家に招いた根取は全くの文盲で、八十何歳の老婆であつたさうであるが、よく三百二十行の長詩を誦したといふ。この琉球の例は、文字のある社會のそれではあるが、このことはわが本洲地方の田舎の盆踊などの時、その音頭取は却つて文盲の人が多く、しかも可なり長い叙事詩的な、さの文句をよく誦記して唄ふの類である。後に論ずるつもりであるが、誦誦には詩の形式が最もよいのであつて、いかなる民族も、文字の無い時代の文學は詩であつたといはれてゐる。わが語部もはじめは必ず叙事詩の形式において歌ひつゝ物語つたのであらう。

次に、金出一京助氏の著「アイヌの研究」（頁四一）を引用して、未開民族の語部の考察を終へようと思ふ。文献以前の社會に、國民傳説が必要な智識の見てゐたといふこと、及アイヌの社會の傳説傳承者の家系のことなどは、偶々昔の語部といふものゝ社會的意義及びその存在の可能を暗示するものではあるまいか。尤も古事記の中のあの管々しい神統や歌などについて、全く懷疑的態度を示す向もある様であるが、其は一は今日の文字を有つ者から見ると起る不思議さなので、現に文字のないアイヌ種族の中に於ける古傳説傳承の状態を見たならば必ず思ひ半に過ぎないものがあるであらう。丁度盲人は目明の人には想像もつかぬ程に觸覺が發達してゐると同じ事であらう。紫雲古津の詞曲傳承者が私に傳へた傳説が、一人で古事記の約數倍の量、一千頁に垂んとして、まだ其の暗誦する詞曲の全部ではなかつたのである。その外、同人が東蝦夷の主なる首長數十家の家系を暗んずること、妻妾嫡庶の末に至るまで洩さず形然たる一部の系譜を成す程のものであつた。だから希臘のイリア

ツド、オデイツセイや印度の吠陀やマハーラタなどいふものが、文字に上された前、或年代の間、口づから傳承されたといふことも、今の人が考へる程考へ難い事ではないと私には思はれる。

金田一氏の古事記に言及した點は私の必ずしも賛し得ない點である。何故なら前にも述べた如く、古事記の編纂は *unlettered age* のことではないからである。しかしながら、以上各方面の材料によつて、語部は文字の無い社會に共通の現象であることが首肯されると思ふ。

しかるに、わが國の語部は如何にして發達したか、また如何なることを物語つたであらうかを知るに足るべき文献は殆ど存在しないといつてよい。そこで、想像的推論を試みれば、祖先崇拜の念の強いわが民族、また皇室尊崇の念の強いわが民族としては、主としてその民族または宗家の系譜やそれにまつはる傳説、及び皇室の系譜や皇室に關する傳説などが中心として物語られたであらうと思はれる。而して、他の一面においては、原始民族の藝術として興味本位の説話や、また原始民族の知識慾から生れた事物の起源的説明や地名の由來や、また信仰から自ら生れた神話的な物語などが語部によつて物語られたに相違ない。而して、それらの物語の主なるものが、だんく、と精練されて帝紀や舊辭に成文的物語とされ、更に古事記や日本書紀に轉錄されるに至つたものであらう。

さて、語部の性質を考察するに當つて、とにかく一應參考すべきは貞觀儀式・延喜式・北山抄・江家次第等の文獻である。貞觀儀式の第三卷には左の如く記載されてゐる。

皇太子自_レ自_レ東方掖門、親王入_レ自_レ西門、大臣以下、入_レ自_レ南門、各就_レ幄、下座、六位以下在_レ暉章修式兩堂後、其群官初入、隼人發_レ聲、立定乃止、詔、國栖奏_レ古風五成、次_レ延紀國奏_レ國風西成、次_レ語部奏_レ古詞、次_レ隼人司率_レ隼人等、從_レ興

禮門參人、於_レ御在所屏外、北向立、奏_レ風俗歌舞、主基亦同

これは、いふまでもなく大嘗祭の卯の日の儀式である。また、延喜式の神祇踐祚大嘗祭の條には次の如く記されてゐる。

凡_レ物語門部、語部、左右衛門府、九月上旬、申_レ官預令_レ量程參集、物部左右京各二十人、門部左右京各二人、大和國八人、山城三人、伊勢二人、紀伊二人、語部、美濃八人、丹波二人、但馬七人、因幡三人、出雲四人、淡路二人、とあり、また下文の別條には、

宮内官人、引_レ吉野國栖_{十二人}、檀笛工_{十二人}、著青摺布袴、入_レ自_レ同門、_{六位}奏_レ國風、伴宿禰一人、佐伯宿禰一人、各引_レ語部_{十五人}、著青摺布袴、入_レ自_レ東西掖門、就_レ位、奏_レ古詞。

とある。而して、北山抄や江家次第にも畧々同様な文が載つてゐて、何れも「語部奏_レ古詞」とある。

さて、語部が大嘗祭の儀式に奏したといふ古詞は、如何なるものであつたかは全く不明であるが、前述の大同本紀の天牟羅雲命の故事の如き或定まつた文章があつて、それを各國の語部の子孫等に讀ませたのであらうと思はれる。即ち語部の餘風を尊重したのであらうと思はれる。即ち、貞觀や延喜の如き文化の進んだ時代においては、すでに語部はその專業を失つて、たゞ名だけ残つて居たのであるが、上代の語部が重要な性質を帯びてゐたので、その風習を重んじ、朝廷の儀式に際して一定のゆかりのある諸國から語部を召集して古詞を奏さめたのに相違ない。而して、大嘗祭に語部が古詞を奏するといふ風習は恐らく餘程古くからあつたことで、そのはじめは名實とも備はつた語部によつて物語が奏せられたのであらうと思はれる。

以上のやうなわけで、語部の仕事を示してゐる唯一の文獻である儀式類の書の記事によつては語部の性質の或一面だけをうかゞふに止まり、古代の語部の性質を十分に知ることは不可能である。津田博士は、これらの儀式類の文獻によつて、語部の性質を見、而して語部はたゞ儀式の際に古詞を奏するだけのものだと思はれたから、上古における語部の存在を否定してゐられるのであるが、それでは餘りに形式論に過ぎると思ふ。

しかるに、こうに文學的研究の方面から語部の存在と性質とに關して極めて正しく且つ首肯し得べき主張を示してゐるのは、平内雄藏博士の「小説神髓」における説である。^(一五)

それ儘々惟みるに小説野乘の行はるゝは其源遠く遼焉たる上古の時代になりといふべし。其の然る所以を知らまじく欲せば、試に社會の淵源に遡りて其狀態を察せざる可からず。上古の社會狀態はいかにといふに、東西人おなじからず、南北地異なるに係らず、一個の家長を尊崇して之を酋族の長となすこと人間社會の通則なり。かゝれば戦鬪いと烈しく優勝劣敗急激なる未開野蠻の上世にありては、猛然荒蕪の間に起りて俄に一家の主長となり、忽ち一族の首となるもの或はすくなしとなさざるなり。かゝる性質の家長にして己に酋族の首となりなば、其子孫等にものがたるに何等の事柄を以てする乎。想ふにおのれか經驗なしたる艱難辛苦の事情はさらなり、其武功などを語りつべし。しかして此等の物語は其人したくし經驗し若くは親く見聞せる眞實の事蹟に相違なければ、子孫が之を傳聞してまた其子孫に語るに及びて、あるひは記憶の誤謬より附會に原因して、竟には事實の髓を亡び、咄々奇怪の物語を長く口碑に傳へ存して、鬼神史（魔イソロジイ）神代記の基をひらく。

と述べて、神代史に奇怪の物語の多くなれる主なる原因三種を教へてゐられる。第一の原因は、酋族次第にさかえて

勢強大になるにつれ、人の心おのづから傲りて些々たる事をも巨大にいひなし、他の酋族に誇ること。第二の原因は、人間はうまれながらにして奇異を好むものであるから、別に其の必要はなくとも、假作の說話をもうけて史傳を誤ること。第三の原因は、國歩やうやく進み、文明次第に開けるに従ひ、其の國君といはれるやからは、下賤の匹夫のなりあがりや我が太祖なりといはるゝを快からぬことに思つて、附會の説をつくりもうけて太祖の事蹟を粧はうとするに至る。況んや太古無智の人民は敬信の念が深いから、故意に物語を假作しなくとも、自然に祖先を神となし天孫なりと思へるをやと論じ、更に曰はく、

夫れ神代史は荒唐なれども、其質小説とおなじからず。其の記載せる物語はもとより全く事實にあらねど、また虚構ともいひがたかり。假作の話譚と訛傳の事蹟と相混淆して、事實を粧ひもて史體をばなしたるものにて、其質なかばは正史に屬し、なかばは小説に類するものなり。此を以て考ふれば、正史の本源は神代史なり。羅マン（奇異譚）の濫觴も神代史にあり。史と小説とは其源おなじ、只累世の變遷にて今日の差を生ぜしのみ。

坪内博士は直接には語部について何も言及してはゐない。しかし、右の文によつて、吾人は語部發生の事情を明かに想像することが出来る。即ち、酋族の長がその權力と位置とを保持し發展せしむる必要上から、こゝに各酋族の長に附屬して、専らその酋族に關する物語を記憶し創作し傳達するところの語部なる專業者が生じなくてはならぬのである。

さて、原始時代においては、何れの民族の文學も叙事詩（エピック）である。このことは、ひとりわが大和民族のみ例外であらう筈がない。即ち、ギリシャのイリアド、オデッセイの如き、トロイ戦争以來民間において歌はれてゐた

ものを、ホーマーによつてやゝ精練されたに過ぎないものであり、現在でもアフリカの土人は。土人にすら意味の分らなくなつた古典の叙事詩をもつてをり、琉球の根取は歌ひ、アイヌは金田一京助氏によれば詞曲であり、支那でも詩經の如きは古來から傳はつてゐたものだといはれてゐる。ただ、わか國の古事記や日本書紀や風土記等は直ちに叙事詩とはいはれず、何れも散文の形式をとつてゐるが、未だ文字を有しなかつた時代の語部の物語は必ず叙事詩であつたであらうと思はれる。そのことを吾人に推測せしめる一つの材料は、北山抄や江家次第にある次の如き文である。北山抄には、

國栖奏、古風五成、承平記云、其以指摩、孔次、悠紀奏、國風四成、其聲似神樂、連主、次、語部奏、古詞、其音似祝詞、又涉、歌聲、とあり、江家次第にも

語部奏、古詞、其音似祝、又涉、歌聲、出雲美濃但馬語各奏之。

とある。重野安釋博士は

此ノ諸書ニ聲音似祝詞、又涉、歌聲、トハ、祝詞ヲ宣ルニ似テ、又歌ノ聲ニ同ジキ處アリトノ意ト聞ユ、古ク宣命譜トイフ物アリテ、宣命ヲ宣ブルニモ曲節アリシコト灼ケレバ、語部ハ更ナリ、祝詞又中臣ガ誦詞ヲ宣レル、出雲國造ガ神賀詞ヲ奏セル、天皇崩御ノ時ニ、諸臣ガ誦詞ヲ奏セル皆曲節ヲツケテ語リケムコト知ルベシ。

と述べてゐられるが、語部が後世の儀式において或一定の古詞を奏するに當つて、古來語部が物語つた様式の曲助を用ひたと見るのが至當であつて、上古の語部は叙事詩をうたつてゐたのであるといふ推測の有力なる一つの資料である。更に後に述べる神語と天談歌とのことを考へあはせると、上古の談部の物語が叙事詩であつたことは疑ふ

べからざることである。

元來原始民族の文學が叙事詩であるといふ理由は、詩の形式において暗誦することが便利であるといふ點と、もう一つの理由は、原始人が自らのよるこびの感情のために口をついて出る言書には必ず一種のリズムを帯びてゐたであらうこと、なほ、今日の兒童がよろこびの時にリズムミカルな言葉——一種の素朴な童謡——を發するのにも明かである。それが、原始民族の文學をして詩の形式をとらしめた所以である。尙坪内雄藏博士は次の如く述べてゐられる。

文運のいまだ開けざりし比になりては、世々の史傳を傳ふるには必ず唱歌を用ひたりき。蓋し文字の用を知らず、筆記の法をもしらざりける上古蒙昧の世に於ては、史傳を詩歌に綴りなして子孫に傳唱せしむるをば最も簡易利便にして誤謬すくなき法ぞと思へり。さる程に唱歌師等が史傳を唱歌にものするに臨みて、また第一に記憶するを誦誦するに便ならむことを望むが故に、自然に、用ふる言葉の如きも成るべく平滑流暢にして吟誦たさむに便なるをば力めてえらみ用ひしなるべし。

と論じ、唱歌師が人の注意を促するために、行文優雅にして、閑麗婉曲なる巧妙な文句を綴らんとして、ひたすら情を寫すことに力め、爲に事實を枉ぐることも多く、かくして多くの虚飾を加へ、漸く時代に媚びる程に、唱歌の傳ふる史傳の事蹟漸く本色を失ひつゝ、其の本來の傳記に比すれば甚しく異なるに至るのである。是れ、しかしながら神代史。鬼神誌が全然正史の體を脱して排闥の料となれる時であつて、即ち小説の濫觴をなすものであると論定してゐられる。

坪内博士の所謂唱歌師こそ文字の無かつた時代の語部であらねばならぬ。而して、語部の物語は唱歌即ち叙事詩であらねばならぬ。

五 語部と神語及び天語歌

古事記の編纂について、古事記傳の如く、すべてを事實と見て肯定することは、今日の學者の理智を以てすれば到底不可能のことである。即ち帝紀や菟辭に存在してゐたであらうと思はれる幾多の物語は、多くは個々獨立の物語であつたものを、古事記の編纂に當つて、それを皇室のことに關する事柄のやうに結びつけたものだと思はれる節々が極めて多い。その中でも、語部の存在と語部の物語の形式とに極めて鋭い暗示を與へるものに神語と天語歌がある。私の考へでは、神語も天語歌も何れも個々獨立の一つの古代藝術であつたと思はれるのであるが、それが何れも或事蹟と結びつけられてしまつてゐるのである。

即ち、神語は古事記においては、八千矛ノ神の段の長歌五首を言ひ、その形式は、終の一首を除いてはその篇尾毎に「コトノカタリゴトモコナバ」といふ語がついてゐる。而して古事記には

此謂之神語也。

とある。次に天語歌は古事記の雄略天皇の段にある三首の長歌のことであつて、その何れの篇尾にも同じく「コトノカタリゴトモコナバ」とある。而して、古事記では、

此三歌者、天語歌也。

とある。古事記傳では神語をカミゴトと訓み、天語歌をアマゴトウタと訓んで、餘言歌の意に解してゐるが、今日ではこの説を採る人は無い。

さて、神語といひ天語歌といふ名稱から考へても、これらの歌が語られたものであるといふことは推測される。而して、それは語部によつて語られたものでなくてはならぬ。思ふに、語部の語る物語を神語とか天語とかいつたのに相違ない。即ち後に天語連などの名稱の起つたことから、この推測は決して無理ではない。而して、古事記に存する神語又は天語歌は何れも獨立的に上古から語部によつて歌はれて來た一つの藝術的な詩歌であつて、決して一八は千矛ノ神の事蹟、一は雄略天皇に關する事蹟などいふものでは無かつたと思はれる。いつたい、いくら古代であるからといつても、個人と個人とが相對して戀をり語合ふとか、また命乞ひをするとか、更には今旅行に出かけよとする夫を引き止めて、歌で意中を傳へるとか、律語で語り合ふとかいふことは決して有り得べからざることである。若し、さうした急の場合に、實際に歌で贈答したとすれば、その歌はその場で即興的に作られたのではなくして、常に其の社會で歌はれてゐた歌を、その場ですぐに歌つただけのものであらう。而して、神語も天語歌も何れも「コトノカタリゴトモコナバ」といふ恐らく一種のハヤシであらうが、さうした言葉がついてゐるのが一は神代のことであり、一は雄略朝のことであるとしては、餘りにも不思議な一致である。そこで、富士谷成章の如きは、その北邊隨筆の中で、八千矛ノ神の長歌は雄略朝に出來たものであらうと見てゐるのであるが、雄略天皇の段の天語歌をどこまでも雄略天皇の事蹟と見、古事記上卷は後世の偽作と見るからかうする説も出て來るのであつて、古事記編纂の事情をよく考へれば、こんな議論は出て來ないわけである。

私の考へでは、前にも言及したやうに、古事記編纂は太_ノ安萬侶の序文にある通り、稗田_ノ阿禮のよみならつた帝皇目繼と先田舊辭とを安萬侶が結合して又は組合はせて出来上つたものであると思ふ。で、舊辭の中には、いろいろの民間説話などが入つてゐたであらうが、それを皇室または神々の事蹟に結びつけて一つの統編を成しあげたのである。

そこで、神語とか天語歌などは、何れも個々の長歌として存在してゐたのであるが、それは比較古いもので上古の語部のうたつたまゝの原形を存してゐたものであらう。即ち、「コトノカタリゴトモコトバ」は今日の言葉でいへば、「この物語のあらましは斯くく」。位のことで、太古の語部が物語の終りにつけた定句であつたと思はれる。今日でも、田舎の爐邊などで櫓の火のそばに打寄り、昔噺をした後で「イツチガサキ申シタ」など、いつて噺を結ぶところがある。

そこで、古事記中の他の長歌や物語を神語とも天語歌とも呼ばずして、何故に、彼の長歌のみをさう呼んだのであらうかといふに、それは文字の使用が廣まり、文化の發達した天武朝頃になつては、語部の物語の方法やその物語の内容がすでに如何なるものか分らなくなり、たゞ神語とか天語歌など、呼ばれるものが残つてゐた。それが八千矛_ノ神の段に持つて行つた五首の長歌と雄略天皇の段に持つて行つた三首の長歌であつた。そこで、これは神は語といふものだ、これは天語歌といふものだとか古事記の記者が示しておいたのである。が、それは、そのかみ語部の物語の原形であつて、これだけの原形のまゝで残つたが爲である。即ち、この點からいつても、語部は唱歌師であり、太古の物語は詩の形式をとつてゐたことが首肯されるであらう。

原始文學は韻文であるが、それがだんく、散文になつて行つたのは、人間の理性の發達と文學の使用とにあるので、更に、古事記編纂の如き一つの政治的動機にもついた事業においては、作者のよるこびの心をそのまゝ、うたひ上げる詩歌とはなり得ずして理知的の散文となるのは當然であらねばならぬ。土居光知氏はその著「文學序説」において、

(二八) 多くの民族の叙事詩は韻文であるが我國のそれは主として散文である。

といひ、その理由として、

藝術的衝動が基礎となり、無意識的にみづからの喜のために創められた叙事文學は歌である。我國の叙事文學が散文であるのは、すでに意識的になつた政治的動機が支配したためである。宗教的意識が主になつたために散文的になつた例としてはヘブライの叙事文學がある。

と述べてゐられるが如く、わが國の物語文學として最古の文献たる古事記や、ヘブライ民族の最古の物語文學たる創生記やバイブルの如きは叙事詩ではないのである。

たゞ、文字以前の語部の物語は明かに叙事詩であつたこと前述の通りである。しかし、神語や天語歌はむしろ抒情詩 (Lyric) ではあるが、それは語部の物語つた叙事的物語が多く散文的物語にかはつて行き、その叙事的物語の間にはさまつてゐた若干の抒情詩がその原形のまゝで残されてゐたものであらうと思はれる。

さて、世には稗田_ノ阿禮が語部であるなどといふ人もあるが、恐らく阿禮の事蹟は古事記の序文以外のこととは分らないであらう。その女であるか男であるかすら決して分つたものではないと思ふ。若し、たとひ阿禮が語部の家に

生れた人であるにせよ、すでに帝紀や舊辭の如き書物が存在してゐる以上、それをわざわざ文字をはなれて暗記する必要がどこにあらうか。従つて、古事記の序文に存する左の文の

勅語阿禮、令誦習帝皇日繼、及先代舊辭。

の誦習の二字は古事記傳の如く暗誦の意に解すべきではないと思ふ。それは、定めし漢文とも和文ともつかないであらうところの文體であつたに相違ない帝皇日繼と先代舊辭との文章を阿禮に讀み、學ばせたのである。未だ文學の讀める人のさう多くなかつた時代において、帝紀や舊辭は可なりにもむづかしいものであつたに相違ない。そこで、爲人聰明にして「度目誦レ口、拂レ耳勒レ心」ところり秀才阿禮を選ばれたのであらう。この序文では、度目誦、口の如く、誦を讀の意味に使用してゐるのである。

従つてまた、私は古事記傳や重野博士のやうに、本辭舊辭は語部の語言であるといふ説には従ふことは出来ない。語部の存在は、文字の存在以前または文字の普及のうすい地方においてのみ意義のあることで、わが國に文字が傳來し、それから四五世紀を経過した時代において、しかも中央または朝廷において、語部に史傳や民間說話を暗誦せしめるといふやうなことは考へ得られないことである。(終)

註

- (一) 古事記の編纂は A.D. 712. 風土記遷進の勅の出たのは A.D. 713. 日本書紀の編纂は A.D. 720.
- (二) 百濟の王仁が來朝して論語と千字文とを傳へたのが A.D. 183.
- (三) 古語拾遺、冒頭の句
- (四) 國史綜覽稿卷一、四四丁表

- (五) 大日本古文書卷一、二
- (六) 國史綜覽稿卷一、三十五丁裏
- (七) 黒川眞頼全集第四卷、二頁
- (八) 國史綜覽稿卷一、三十六丁表
- (九) 古事記及日本書紀の新研究
- (十) 日本書記を讀む心得
- (十一) 一九一二年發行
- (十二) p. 37-8.
- (十三) その二六七頁
- (十四) その三一七八頁
- (十五) 小説神髓一三四頁
- (十六) 國史綜覽稿卷一、三十五丁裏
- (十七) 小説神髓一五頁
- (十八) 文學序説第二版一二〇頁